美術表現研究　講義「幼児表象画」描画の発達と特徴

竹永亜矢　　塙　和道

Art Expression Study-Development and the Characteristics of Drawing of the Unit “Young Children’s Representative Pictures”

Aya TAKENAGA　　Kazumichi HANAWA

Abstract

Drawing is an important expressive activity for children who develop by exploring the spontaneous drawing experience that reoccurs in everyday playing and their expression that fosters physical and psychological development, thinking, motivation, and creativity. This paper discusses the characteristics of drawing expression as well as methods of support for drawing activities by analyzing and examining development stages of children’s representative pictures from the ages of zero to six.

Keywords: young children’s representative pictures, drawing, expression, creativity, development

要約

自発的な描画体験とその作品から刺激や感動をうけ、創造性や新しい表現を探索しながら次への発達過程へと歩みを進める子どもにとって、日常的なあそびの中で繰り返される描画は心身の発達、意欲を育む大切な表現活動である。

本論では、0 歳から 6 歳の幼児表象画の発達段階にあわせて分析・考察し、描画表現の特徴を踏まえた子どもの描画活動への理解と援助の在り方を呈する。

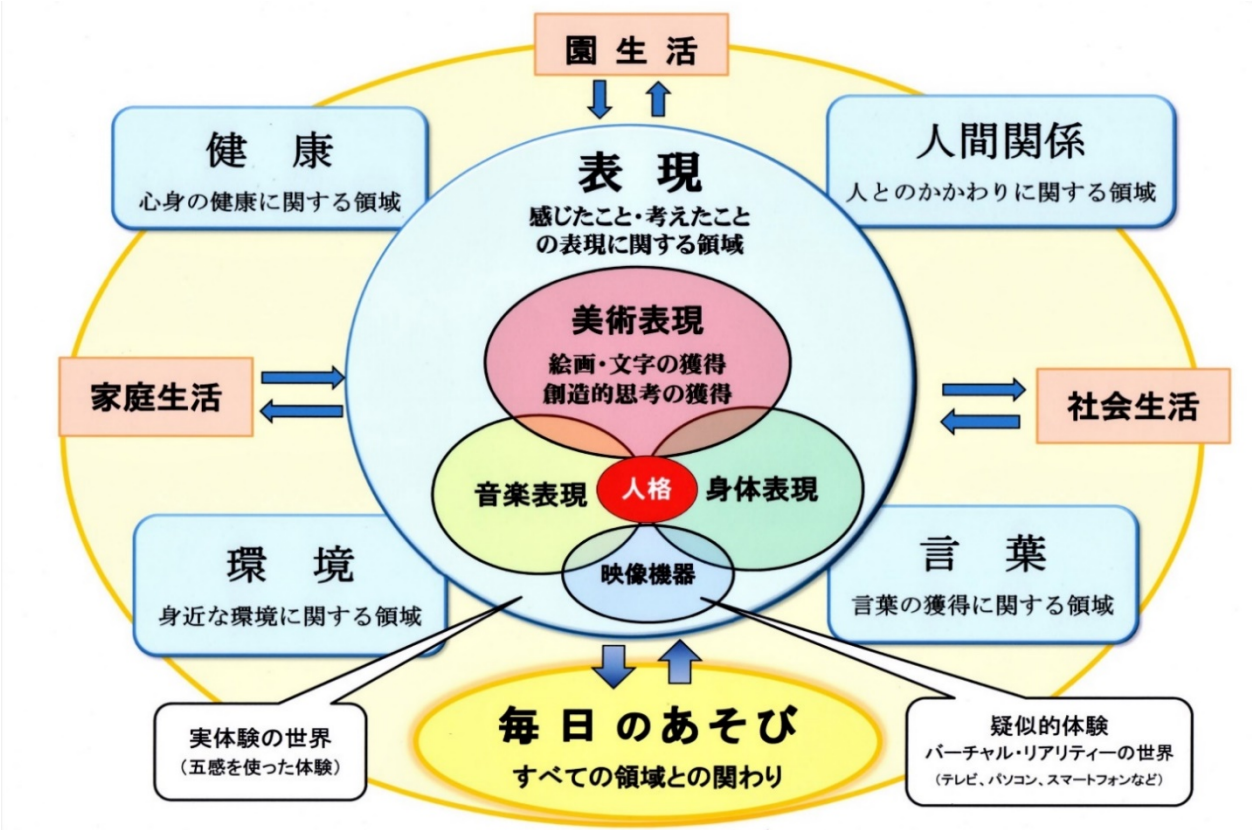
キーワード：　幼児表象画・描画・表現・創造・発達

1．はじめに

すべての領域に実体験を通して関わりながら発達を遂げる子どもにとって、毎日の遊びの中で繰り返される描画は、大切な表現活動である。近畿大学九州短期大学保育科における講義「幼児表象画」では、0 歳から開始される初めての描画から、幼児教育を終了する 6 歳までの絵画の発達と、子どもの個性や生活環境、人間関係によって発達段階のタイミングや速度が異なることを理解し援助する大切さを教授している。

本論では筆者（竹永・塙）の近親者（本人・姉妹・孫）の幼少期の縦断的作品群をローダ・ケロッグ（Rhoda Kellogg1969）描画発達の分類とジェローム・シーモア・ブルーナー(Jerome S. Bruner 1976)「表象絵画の発達段階における分類」に則り幼児絵画表現の発達を解説した（竹永・塙，2017）3 歳～6 歳女児 A、S の作品に 0 歳～3 歳男児 K、女児 E の作品を加えた 4 人の子どもの縦断的作品群から、五つの領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）と連動して歩みを進める描画活動の発達と表現の特徴を考察し、各段階における子どもの描画発達への理解と援助の在り方を提案する。

図１．表現領域図



2. 五つの領域と描画活動の発達

図 1. に示すように、表現領域（美術表現・音楽表現・身体表現）における子どもの活動は、日常生活やあそびの中で他の領域と常にかかわりを持ち、人格形成の基盤となる。自身

の表現が他者に認められ、共感された瞬間、そこに存在することに充実感を抱き、意欲や探求心を高めながら成長する。

自己表現は、人間が生まれた瞬間からその発達に即した方法で行われる。他者とのコミュニケーション（人間関係）は生まれたての赤ん坊の泣き声や保護者に向けたほほ笑みに始まり、身体の発達（健康）と共に物を握り、腕を振り回せるようになる。初めての描画（美術表現）が開始され、その描画を介して「ママ」「ワンワン」といった保護者とのコミュニケーション（人間関係・言葉）へ、描画を通したコミュニケーションは言葉の発達へとつながる。身体の発達と共に外遊び、自然散策、動植物の収集や観察（環境）体験の中で目にしたものや触れたものからの刺激は創作意欲を掻き立て、画用紙の上だけでなく時には地面の上や曇ったガラス窓に描画表現される。ひろった小石を動物に見たてたり、葉っぱに穴をあけ、顔に見立ててお面を作るなど、あそびを通してすべての領域と関りながら五感を使った「実体験」の反復学習により、次への発達を獲得していくのである。

脳の発達と子どもの成長について、脳のなかではニューロンが互いにシナプスといわれる結合を繰り返してネットワークをなし、感覚器官からの刺激が長期記憶として脳に蓄積構築される。人間の手は脳の発達のために大きな役割を担っており、成長と共に手を使ったものとかかわる行為が脳の成長を助け、その経験が脳細胞のネットワークをさらに発達させることにつながっている。山本・芝田・熊谷（2009）はこう述べ、子どもの成長過程において、豊かな実体験の重要性を説いている。

スマートフォンやゲーム、パソコンが普及した現代の子どもたちにとって、映像機器を介したバーチャルな疑似的体験によるあそびの時間が増え、描画や造形といった実体験を伴うあそびが大幅に減りつつある。幼児期の体験が子どもの脳の発達にかかわることから、身近な映像機器（テレビ・スマートフォン・パソコン）と子どものかかわりは、慎重に選択し、こどもの生活やあそびの環境を整えることが重要である。

3. 方法

（1）描画の分類方法　Rhoda Kellogg 幼児絵画の発達からの分類

Ⅰ．スクリブル（scribbles）前期・後期

Ⅱ．ダイアグラム（diagrams／単体図）

Ⅲ．コンバイン（combines／結合図）

Ⅳ．アグリゲイト（aggregates／集合図）

Ⅴ．ピクチャーステージ（picture‐stage／絵画期）

（2）表象の分類方法　Jerome S. Bruner 認知能力の成長と３つの表象

Ⅰ．動作的表象（enactive representation）

自己中心、外と内の区別が確かではない。動作による直接的な（感覚運動的）把握。

Ⅱ．映像的表象（iconic representation）

表面的な形のイメージ（映像）による対象の把握。

Ⅲ．象徴的表象（symbolic representation）文字・記号・言語による対象の把握。

上記３段階の表象発達を遂げた成人においては、全ての表象を持ち合わせて存在している。

（３）分類（対象作品）

４人の子ども（男児 K・女児 E・女児 A・女児 B）の 0 歳から 6 歳までの縦断的作品群から、スクリブル（scribbles）～絵画期（picture‐stage）まで描画の発達段階の特徴を示す表象画を抜粋し解説する。

（４）制作年齢（週齢）について

４．（１）Ⅰ～Ⅴの解説に用いられた子どもの作品に制作時の年齢と週齢を表記する。描画の発達において次の段階へと移行するタイミングは優劣に関係なくそれぞれの子どものタイミングで移行し、時には週単位で次の段階へと移行する。女児 2 人の描画段階への移行時期の比較（竹永・塙，2017）から、移行時期のタイミングが 8 か月の差がある段階もあったものの、最終的には同じタイミングで最終段階へと発達を遂げている。このことから年齢や週齢は目安であり、子どもの個性や生活環境によりおなじ年齢、週齢の子どもでも移行のタイミングが異なることを認識したうえで作品を視ていく。

4. 表象画の発達過程と描画の特徴

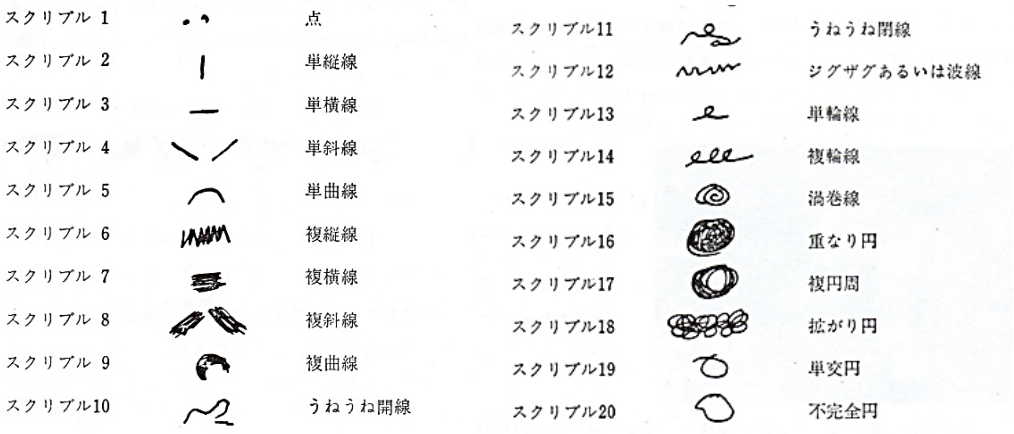
（１）－Ⅰ．スクリブル（scribbles）

> 基本的スクリブルとは 2 歳あるいはそれ以下の幼児の作る 20 種類の形のことである。これらの動作は各種の筋肉緊張の様式をしめすもので視覚的ガイダンスが必要なわけでではない。（ローダ・ケロッグ 1998）

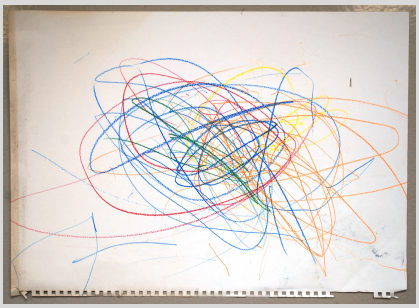
子どもの描画は、握ったクレパスを振り回した時、それが当たった床や紙の上にその後が残る最初の描画から、自分の行為の軌跡としてスクリブル描画が始まる。腕をあらゆる方向に動かし、画面にたたきつけ、偶然、必然的にそこから生まれる様々な形のバリエーションを記憶し、形のイメージを蓄積する。発達とともにその形を組み合わせ、描画表現が個性的により豊かに発達していく。スクリブルは表象画の発達段階の全て、自分が表現したい形のイメージを持つ大人にも継続して描画される。

表象の段階は動作的表象期である。描画は手を動かす、振り回す、といった動作による結果であり、その視覚的認知を繰り返しながら形の記憶を蓄えていく。

図２．基本的スクリブル 20 種類



出典：ローダ・ケロッグ（1998）p.19

スクリブル（前期・後期）	表象：動作的表象期
	作品 4-1　0 歳 11 カ月（47 週目） スクリブル前期「初めての描画」 紙の上を叩き、腕を振り回した軌跡が描画されている。自分の行為から紙面に点や線の跡が残ることを発見し、記憶する。 初めての描画が開始されたこの日、描画から数時間後、初めて自分で歩いた。
	作品 4-2　1 歳 6 か月（81 週目） 　作品 4-1 の点や直線によるスクリブルに、往復する線（複横線）が認められる。経験を重ね、自分の行為が描画に繋がることを認識している。往復の線は腕の動きと身体の発達に伴い、大きくダイナミックになる。
	作品 4-3　1 歳 8 か月（91 週目） より大きく、画面いっぱいに描画。往復運動による線から、ぐるりと円を描く線が加わり、自由な腕の動き、力強い線から身体の発達も感じ取れる。まだ完全に閉じられた円ではないが、図２に示された、基本的スクリブル１、2、３、19、20 が確認できスクリブルの種類が豊富になっている。

	作品 4-4　2 歳 8 か月（146 週目） スクリブル後期。これまで、画面の中にあらゆる方向から描画されたスクリブルに、ある一定の領域が認められる。ひとつの塊のなかにスクリブルされ、ダイアグラム（単体図）への移行が始まっている。
	作品 4-5　2 歳 8 か月（146 週目） スクリブルからダイアグラム（単体図）へへの移行。スクリブルの中に、線で囲まれた単独の存在が表出する。

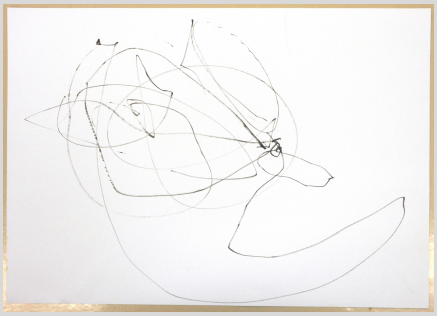
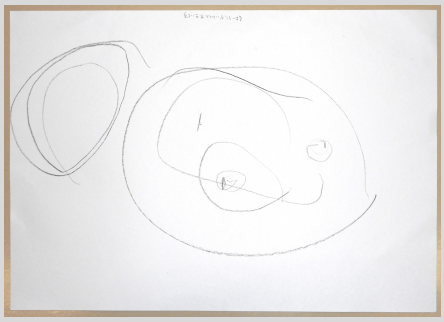
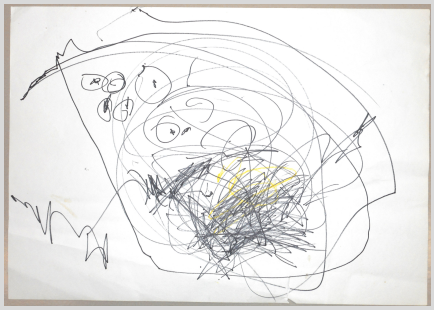
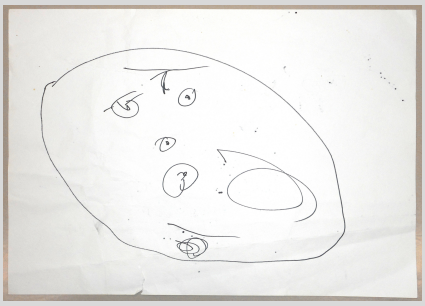
（1）－Ⅱ．ダイアグラム（diagrams／単体図）

幼児は 2 歳までに自分の描くスクリブルをある明確な配置様式の中に納めるものだ。すなわち形は紙面との関係を保って配置される。3 歳までには，単線〔往復運動による複線ではなく〕で十字形を作ったり，円，三角，その他の形－ダイアグラムを描くようになる。（ローダ・ケロッグ 1998）

スクリブルの後期から単体への移行が始まると、グルグルと自由に描画された形（図 2. スクリブル 16，17，18，19）の中に偶発的に円らしきものが生まれる。そこから次第に閉じられた円が現れ、それが安定して見られるようになり、画面に散らばったスクリブルをひとつの円や楕円で包含した範囲を持つ描画がなされる。ダイアグラム（単体図）は他のスクリブル、あるいはダイアグラムのいずれかとともに、時にはその両者が描画される。

スクリブル期、母親が描画した絵の上から塗りつぶすといったコミュニケーション方法がとられるが、スクリブルによる形の獲得と言語の発達に伴い、物に名前がある事を理解するようになり、クリブルやダイアグラムの描画を介して援助者とコミュニケーションをとりだす「意味づけの絵」が開始される。

表象段階は動作的表象期で、描画の経験を積み重ねながら次の映像的表象期へ移行していく。

スクリブルからダイアグラム（単体図）への移行　　表象：動作的表象～映像的表象	
	作品 4-6　2 歳 9 ヵ月（147 週目） 基本的なスクリブルの組み合わせが、ある明確な配置様式の中に納められるようになってくる。体の成長と共に画面全体を眺める目線や手の動きが変化し、用紙の形や大きさへの認識が生まれてきているのが分かる。
	作品 4-7　2 歳 9 ヵ月（147 週目） 円が閉じられようとしている。線の開始点と最終点が重なり、閉じられた円の描画は、豊かな描画表現へと展開される。円の中に丸が配置されると、顔を連想させる。描画の中に顔を見つけ、それを記憶し必要に応じて顔として描画する。
	作品 4-8　2 歳 9 ヵ月（147 週目） 表象画の発達段階全てにおいて、新しい表現を探索する時、スクリブルが現れる。スクリブルを描画しながら実験しているのである。ここでも図 3-7 に描画された顔のようなダイアグラムにスクリブルがなされ新しい表現と発達の兆しが感じられる。
	作品 4-9　2 歳 9 ヵ月（147 週目） 作品 4-8 の探索的描画から、スクリブルが整理され、より明確な顔のようなものになっている。完全に閉じられた円が構成され、直線も加わり、顔のパーツが揃ってきている。複数のダイアグラムによる構成の表出はコンバイン（結合図）への移行を感じさせる。

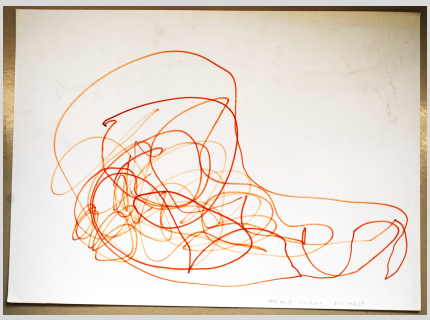
（1）－Ⅲ．コンバイン（combines／結合図）

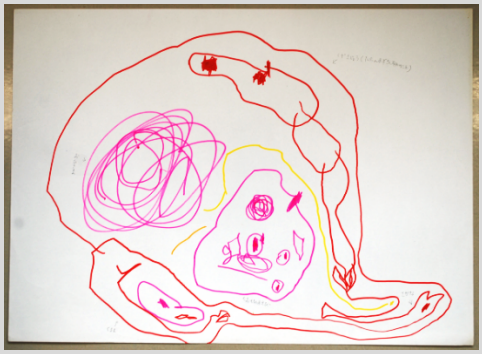
ダイアグラム二個が結合される時、私のコンバインと呼ぶものが出来る。
（ローダ・ケロッグ 1998）

ダイアグラム（単体図）からコンバイン（結合図）へ、行きつ戻りつしながら移行される。表象画の発達はスイッチが切り替わるように次の段階へ移行するのでなく、スクリブルから始まる全ての段階を持ち合わせながら個々のペースで発達の歩みを進める。

生活の中で目に触れる形の記憶、描画体験から日常的に繰り返し表現する形態のバリエーションが増え、それらを描画することを試みる。好奇心や探求心から自発的に表現の実験を繰り返す。

表象段階は映像的表象期である。動作的表象期に繰り返す体験から蓄積された映像的記憶（表面的な形のイメージ）を活用し、対象を把握する。

ダイアグラム（単体図）からコンバイン（結合図）へ　　表象：映像的表象期	
	作品 4-10　3 歳 1 か月（167 週目） コンバイン（単体図）図 3-9 に表現された顔のような描画に、スクリブルで獲得した波状の形が構成され新しい試みによる表現が確認できる。大きい塊の下に直線で足のような表現、複数のコンバインによる構成が開始されている。
	作品 4-11　3 歳 1 か月　（168 週目） 作品 4-10 の描画が整理され、表現の目的が明確になってきている。ダイアグラム（単体図）からコンバイン（結合図）に入り、身近な人物の存在（母親の顔）、直接見る事の出来る自分の体の一部であり、活動するうえで必要な手足、といった印象に残るもの、形の認識が描画に表れ、頭足人間などの表現につながる。
	作品 4-12　3 歳 2 か月（170 週目） ダイアグラム（単体図）作品 4-6　で描画された形状を思い起こさせる。以前描画した形を想起させ、再現する中で新しい表現を試みる。ここに描画されたスクリブルは、蛇行する自在な線の動きに意図的な実験の形跡と身体的発達が伺える。

	作品 4-13　3 歳 3 か月（176 週目） 作品 4-12 から展開する形に包括されたスクリブル、画面中央作品 4-9 コンバインで獲得した円の中の顔のような表現、この描画の 1 週間前にアイスクリームとして描画された右側鎖状の形は、別のものとして表現されている。スクリブル、ダイアグラム、コンバイン、全てを持ち合わせて描画表現していることが分かる。

（1）－Ⅳ．アグリゲイト（aggregates／集合図）

児童がアグリゲイト－三つあるいは三つ以上のダイアグラムの結合によってできた形－を作り始める時期になると、彼らは視覚的なアイデアの蓄積をもった小画家として行動し始める。（中略）　3 歳から 5 歳までの児童の絵の大部分をアグリゲイトが占める。（ローダ・ケロッグ 1998）

表象画の発達において、短い期間で次へと移行するコンバイン（結合図）を経て最も長いアグリゲイト（集合図）へと移行する。表象段階は映像的表象期である。

日常生活において、心身の発達に伴い行動範囲も広がり、体験や目にするもの、他者とのコミュニケーションに刺激と感動をうけ、それらを記憶しながらこれまで獲得してきた形態のバリエーションを基に構成し描画する。スクリブル期からここまで、描画の実体験が豊富にあるとたくさんの形を記憶の引き出しに蓄え、それを活用する為、描画表現がより豊かになる。映像的表象期のため、見たもの、記憶したものは描画できる。

この時期の幅広い実体験による感動、他者との共感が豊かな描画表現の基盤となる。

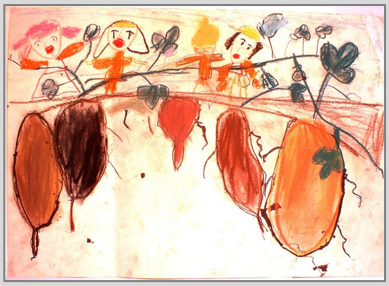
アグリゲイト（集合図）	表象：映像的表象期
	作品 4-14　3 歳 4 か月（178 週目） これまでの経験で蓄えた形をさらに複雑に構成し、新しい形態の獲得も見られる。左上に描画された塗り込みのある矩形はこれ以後の描画に活用され、表現の定着と応用が確認できる。映像的表象期、見たもの、手にしたもの、印象に残った経験を映像として記憶し、新しい描画表現に活用していく。

	作品 4-15　3 歳 6 か月（186 週目） より明確な人物表現（頭足人間）でアグリゲイト（結合図）作品 4-11 の頭足人間から、描画に取り入れた形の要素が増える。顔の下に描画された線は 5 本あり、足の指の表現とも考えられる。映像的表象期で、形だけでなく数の把握も正確になってくる。
	作品 4-16　3 歳 11 カ月（210 週目） この描画は「お墓」と題されている。 円を中心に描画された時期から形の獲得が進み、矩形が表現する。体験の中で印象に残った形を記憶し描画する。左の矩形内に描画されているのは火が灯された蝋燭で、お墓の映像を正確に記憶しているのが分かる。
	作品 4-17　4 歳 0 か月（214 週目） 頭足人間を中心に、物と物との関係を二次元的に秩序付けて表現する基底線が描画される。（この描画では地面）視野が広がり、身の回りの物や人との関係への理解が進むと、それが描画にも反映される。この時期の特徴である頭足人間から、胴体のついた人物表現が描画され、発達が進んでいることが確認できる。

（1）－V．ピクチャーステージ（picture - stage／絵画期）

空間における物と物との関係が明確になり、人間の表現において、スクリブルから始まり、ダイアグラムでの円の獲得、コンバイン・アグリゲイト（集合図）の構成（デザイン）工程からひとつの円から手足が出る頭足人間に、円や矩形で胴体らしき形が構成され、人間の形として表現されるようになる。表象は映像的表象期から象徴的表象期への移行が開始されるため、描画においては抽象化したカタログの様な模様あそびが出来るようになる。描画と表象の発達に伴い文字の理解も進む。

ピクチャーステージ（絵画期）	表象：映像的表象期～象徴的表象期
	作品 4-18　4 歳 8 カ月（248 週） 「父親」を描画。アグリゲイト（集合図）の頭足人間から、絵画期へ移行した初期段階の人物表現。胴体が付き、胴体から手足が出る。ものの上下関係を示す地面（基底線）も描画されている。映像的表象期で、見た事のある物や人物は記憶だけで描画する。
	作品 4-19　5 歳 0 カ月（268 週） 保育園行事、外部見学の様子を描画。 トラック、荷台とその中身、運転者まで記憶し、知っているものは何でも描画しようとする。それは描画を通しての自己主張であり、描画を介した子どもと援助者のコミュニケーションも盛んになる。自分の表現が受容されると、描画や言葉の獲得をより意欲的に進める。
	作品 4-20　5 歳 11 ヵ月（315 週） 「運動会での自分」自己主張が明確な描画。後ろの友達の大きさに比して、自分を中心に大きく描画する。自分が興味関心のある対象、伝えたいことを中心に大きさの関係を無視して描画する。その違いを指摘する必要はなく、「頑張った自分」を表現した子どもの主張に耳を傾ける。
	作品 4-21　6 歳 0 ヵ月（314 週） 「運動会の玉入れ競争」基底線に沿って並列した人物、かごと人物の高さ、大きさの比較が客観的に把握され、描写されている。人物は全て正面を向いており、子どもの描画の特徴「正面性」を示す。発達が進むと横や斜めからの人物も描画される。

	作品 4-22　6 歳（319 週） 「芋ほり遠足」を描画。芋ほりの実体験から知覚した全てを表現。最も印象に残り、興味を持った芋を大きく、茎や葉、土の中の芋の状況（レントゲン描画）色や形の違いを描画している。新鮮な体験からの発見と感動が、子どもの描画意欲を掻き立てているのが分かる。

5.　表象画の考察　　－子どもの描画へのかかわりと支援－

表象画の発達段階スクリブル～ピクチャーステージ（絵画期）まで視て来た４人の子どもの作品は、保護者や保育園の担任保育士によって日付やテーマが記録、保管されて引き継がれた結果、研究資料として活用されている。描画環境を整え、描画を通した自己表現がなされる瞬間に立ち会い、それを介したコミュニケーションを取る立場にある援助者は、図１．で示した五つの領域全てに関わり、こどもの表現、認識、思考の獲得にとって、最も大切な存在である。本章では、大人（保護者・援助者）が子どもの描画に寄り添いながら、その体験に関わる方法について子どもの描画から考察する。

１）子どもの描画への参加　（共同制作）	
作品 5-1　1 歳 7 か月（87 週目） スクリブル前期　動作的表象期	作品 5-2　2 歳 11 か月（155 週目） ダイアグラム（単体図）動作的表象期
作品 5-1，5-2　共に子どもの描画に母親が参加している。ここに挙げた 2 点に共通するところは、子どもの描画の発達段階にあわせた参加の仕方にある。母親は子どもに描画の指導をしていない。子どもの表現や語り掛けに耳を傾けながら、同じレベルで参加し、一緒に楽しんでいる。作品 5-1 は描画開始から 5 か月のスクリブル初期で、スクリブルされた画面に子どもの手形と母親の手形が構成されている。子どもの手を画面に置かせ、その周囲を母親が縁どり両方の手を描画すると子どもは母親の手を取り、同じ行為を行おうとする。共同作業を通して、母親との描画体験に共感し、楽しんでいるのである。作品 5-2 は、子どもが描画した波状のスクリブルに、母	

親がヨットを浮かべた。2 歳 11 か月のダイアグラム（単体図）時期で、スクリブルの中から表現したいパターンを選択できるようになり、描画を介したコミュニケーションが取れるようになっている。　母親は、子どもが見たり、体験した事のある物や風景を会話しながら描画に参加している。

２）子ども にによる大人の絵の塗りつぶし行為

作品 5-3　1 歳 5 か月　515 日（79 週目）
スクリブル前期　動作的表象期

作品 5-4　2 歳 11 か月（155 週目）
ダイアグラム（単体図）動作的表象期

作品 5-3，5-4　共に大人が描画した文字や絵を子どもが上から塗りつぶしている。作品 5-3 は母親が描画した日付を記録した文字と数字の上にスクリブルされ、作品 5-4 は母親が描画したキャラクターの上にスクリブルしている。

子どもと一緒に描画体験をした際、同じ経験をしたという話はよく聞く。この行為は大人の描画の邪魔をしているのではない。動作的表象期、自分のもの、他者のものを区別する認識がなく言葉が未発達な段階にある子どもは、その時、精一杯できる描画で他者の描画に参加し、描画表現を通して自分の存在を確認しようとしている。子どもができるコミュニケーション手段の一つと捉え、おおらかに受け止めることが大切である。

３）表象画の展開　（形態の獲得と応用）

作品 5-5　2 歳 11 か月（155 週目）
ダイアグラム（単体図）映像的表象期

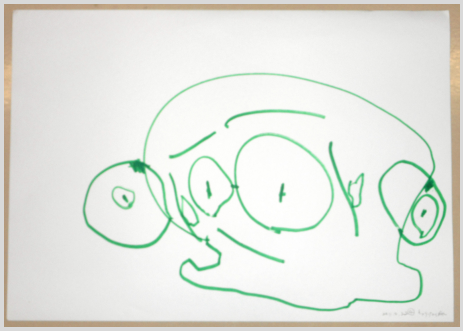
作品 5-6　2 歳 11 か月（155 週目）
ダイアグラム（単体図）映像的表象期

作品 5-5，5-6 は、2 点とも 155 週目と同じ週に描画されたもので、作品 5-5 は母親が描画したキャラクターの目を子どもが塗りつぶしている。

作品 5-6 は明日のお弁当のリクエストを描画した。一見異なるテーマを描画している 2 点の描画だが、母親が描画したキャラクターと子どもが描画した弁当の中の緑の形態を比較すると、同じ構図で描画されているのが分かる。自身が描画したスクリブルだけでなく、周囲に存在するもの、印象に残った形が子どもの描画に表れる。映像的表象期、子どもは大人が描画した形を幾何学形態（ダイアグラム）の構成パターンとして記憶し、後日それを再構成して自分が表現したいテーマを描画している。

玩具の積み木などに〇、△、□といった基本的な幾何学形態が用いられているのは、どの発達段階の子どもも理解できる形態であり、子どもの創造性を邪魔することなく、発達に応じて構成の展開が可能な点にある。

４）描画している子どもとのコミュニケーション



作品 5-7　3 歳 7 か月（192 週目）アグリゲイト（集合体）映像的表象期

描画を介したコミュニケーションはダイアグラム（単体図）前後から開始される。子どもから言葉かけが始まる場合もあるが、黙々と集中して描画している時は静かに見守り、様子を見ながら必要なタイミングで行う。言葉による大人の質問は「何を描いたの？」と具体的な名前を挙げずに尋ねる。大人が「タコ？」と聞けば「タコ」と答える。時に、「タコ」と答えた後に、同じものを「ママ」と言う事もある。子どもの言葉や主張を受容し、対話することが意欲的な描画表現へとつながる。

５）発達に適した課題の選択

表

裏

作品 5-8　2 歳 4 か月（128 週）スクリブル後期　動作的表象期

幼稚園の子どもの集まり会の際、先生が雪だるまを作って表情を描けるように設定したが、示されたお手本を真似て本人は描いているつもりでも、まだ目鼻口を描

けない。（スクリブル後期の段階）先生の指示に答えようと表情を描画しようとする子どもの努力も見受けられる。雪だるまに描画されたスクルブルはこの段階の子どもの描画として自然なものであるが、動作的表象期で、見たもの（先生のお手本）を認識、記憶し、描き写す事はまだ難しい時期である。
　出版物やインターネットを検索すると子どもの描画や造形あそびの課題はたくさん掲載されているが、こどもの発達過程を理解したうえで適した課題を選択することの重要性を改めて感じさせる作品である。

あとがき

スクリブルからピクチャーステージ（絵画期）まで、ここに取り上げた 4 人の子どもが描画した 30 点の作品は 1970 年代から 2011 年の間に描画された、計 579 点から抽出した作品である。子どもの描画は、小さなきっかけや発見によって変化していく。本論では、各描画の発達段階の特徴を示す作品を取り挙げ考察した。

作品がダイアグラム（単体図）に入り円の中に円が生まれ、それが「顔」の様な形になった時、子どもの描画の中に初めて具体的なものの形が表現される。これは国や文化の違いを超え、世界の子どもに共通している。

子どもは自分が興味関心のあるものを描画する。なぜ「顔」なのか、それはこの世に誕生した時から必要なものすべてを与えてくれる最も愛情を感じる存在、子どもの様子をのぞき込む母の記憶である。世代を超え、やなせたかし（1919～2013）作「アンパンマン」が子どもに根強い人気があるのも、子どもが理解できる基本的な形（ダイアグラム単体図）で構成され、幼い頃の記憶からあの顔に母のイメージを抱き、愛着を感じる人が多いからである。

筆者が取り組んでいる彫刻技法の塑造（粘土の彫刻）において、その起源である原始美術の土偶や埴輪に表現された肉感的な女性像は母の象徴であり、人間や顔の表現は子どもの描画表現と重なる。子どもが最も興味関心を抱く対象は、太古から変わりなく表現されてきた「母」であり「人間」なのだ。

子どもの描画発達や作品に表出する個性と普遍性は、人類が長い年月をかけて築き上げてきた人間としての発達や表現が、ひとり一人の子どもに引き継がれ存在していることを実感させる。

最後に、本論で呈した表象画の発達と特徴への理解は、毎日のあそびの中で展開される子どもの表現を見守りながら尊厳を持って接し、自分で成長を遂げるタイミングを待つ「愛情」の上に成り立っていることを申し添えたい。

参考文献

近畿大学九州短期大学　保育科　美術表現研究室資料（2017）『表現領域図』

J．S．ブルーナー著，　岡本夏木他訳（1976）『認識能力の成長（上）』，明治図書出版.

園田正治著（1976）『子どもの絵と大脳のはたらき』，黎明書房.

竹永亜矢・塙和道著（2017）「美術表現研究　講義「幼児表象画」の縦断的記録の検証」『近畿大学九州短期大学研究紀要』，第 47 号 pp.64‐84，近畿大学九州短期大学.

時実利彦著（1984）『脳と保育』，雷鳥社.

鳥居昭美著（1995）『子どもの絵をダメにしていませんか？』，婦人生活社.

内閣府編著・文部科学省編著・厚生労働省編著（2017）『平成 29 年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本 』，チャイルド本社.

塙和道・竹永亜矢著（2016）「幼児表象画に学ぶ、講義「人物画物画演習」の導入法と描法」『近畿大学九州短期大学研究紀要』，第 46 号 pp.47‐51，近畿大学九州短期大学.

H ガードナー著，星三和子訳（1998）『子どもの描画　－なぐり描きから芸術まで－』，誠信書房.

宮武辰夫著（1985）『幼児の絵は生活している』，博文社.

山本肇一・芝田勝也・熊谷啓子著（2009）「幼児期から児童期に、基本的な生活習慣や規範意識を身に付けることの重要性について一脳の発達と心のメカリズムの見地から一」『奈良県立教育研究所　研究紀要　研究集録』，第 17 号 pp.4-5，奈良県立教育研究所.

ローダ・ケロッグ著，深田尚彦訳（1998）『児童画の発達過程　―なぐり描きからピクスチャへ―』，黎明書房.